

P-3-53

手術支援ロボット「ダヴィンチ」導入に向けた取り組み

武蔵野赤十字病院 外科¹⁾、武蔵野赤十字病院 産婦人科²⁾、
武蔵野赤十字病院 泌尿器科³⁾、武蔵野赤十字病院 呼吸器外科⁴⁾、
武蔵野赤十字病院 調度課⁵⁾、武蔵野赤十字病院 入院業務課⁶⁾

○嘉和知靖¹⁾、梅澤 聡²⁾、加藤 俊介¹⁾、高野みずき²⁾、
田中 良典³⁾、井ノ口幹人¹⁾、高崎 千尋⁴⁾、小柳 克己⁵⁾、
河野 嘉文⁶⁾

手術支援ロボット「ダヴィンチ」は2012年から前立腺がんに対する保険適応が認められ急速に普及してきた。2016年度には腎部分切除術に、2018年度の診療報酬改定では、直腸切除・切開術や胃切除術、噴門胃切除術、胃全摘術、膈式子宮全摘術、子宮悪性腫瘍手術など12術式にその適応が拡大された。当院では外科、産婦人科、呼吸器外科を中心に鏡視下手術を適応している患者割合が年々増加している。一方泌尿器科での鏡視下手術の取り組みがやや遅れていたためダヴィンチの導入は見合わせていた。保険適応対象の拡大に合わせて、当院でもダヴィンチを導入すべくプロジェクトを立ち上げた。導入に向けた取り組みとその後の経過を報告する。

P-3-55

新病院移転2年経過後の問題点の検証

さいたま赤十字病院 事務部 施設課

○飯田 浩司、齋藤 雄作

【はじめに】当院は平成29年1月に新病院に移転し、2年が経過した。移転後新病院で運用していく中で、計画段階では想定できなかった問題や課題を検証する。【目的】問題と課題を検証し、今後の当院の改善や新病院建設を計画している病院に対し注意を促すことを目的とした。【方法】竣工後に発生した問題や課題については、職員から常に多くの意見や情報が入り、患者からの意見も満足度調査や投書により収集することができた。担当課である施設課には、職員が疲弊するくらい多くの意見や情報が各方面から寄せられた。その中から問題点を抽出し、優先順位を付けて対応した。今回は、(1)EVの配置と動線について(2)空調管理について(3)医局・更衣室・仮眠室等について(4)院内用IP電話について(5)土地の賃貸借契約について、以上5つの項目に焦点を当てて報告する。【結果】全ての問題や課題を改善することは現実的に不可能であるが、取り組み姿勢は重要である。結果として、要望に対して対応できないことも多くあったが、「やらない判断」と「打たれ強い心」を養うことができた。また、改修工事によっては、費用も発生し施工業者も非を認めないことから交渉が暗礁に乗り上げたことも多々あった。【考察】多くの声を聞いたが、建築や設備の専門知識をもった職員の必要性を感じた。建築に素人の職員だけでは対応は困難である。2年を経過した時点で既に手狭になっており、拡張が難しい状況であることから、職員の増員は充分に考慮する必要がある。要望に対して、「病院としての対応」を求められることが多いため、病院の意思を明確に毅然として回答できる体制が求められる。また、建設には思いがけないアクシデントに遭遇することも多いことから、第三者である専門家から意見が聴取できる環境が最も重要であると感じる。

P-3-57

チームで働く力に結び付く統合分野の演習ならびに臨地実習の評価(第2報)

さいたま赤十字看護専門学校 看護学課

○広瀬 聡子、服部 弓子、川崎 秀子、中嶋 恵

【緒言】当校では、統合技術演習と統合実習によりチーム看護を実践的に学ばせている。昨年の調査結果での課題をもとに、新たに状況把握力の育成と、話し合いの時間と場の確保を目指した統合技術演習と統合実習を展開した。学生の「チームで働く力」に結び付く展開となったか評価した。【倫理的配慮】所属校の研究倫理審査委員会の審査後に実施した。【実践内容】昨年の卒業生に行った調査結果により、今年度は状況把握力の育成を目指し、優先順位の判断や多重課題時の状況を丁寧に振り返る学習を取り入れた。また、話し合いの時間と場を確保するために、統合実習中にカンファレンス等の実践活動外学習を意図的に取り入れた。本演習・実習の前後で、経済産業省が提示した社会人基礎力の「チームで働く力」に関して学生の自己評価を集計した。その結果、「発信力」についてのみ、自己評価の上昇に有意差がみられた。学生は、初めて看護チームを形成し、複数の対象に看護を提供するという経験をする。話し合いの場を意図的に設けることによって、自分の意見を分かりやすく伝えることを意識した結果であると思われる。他の能力要素については、「柔軟性」「状況把握力」に関して、学生は初めての役割の中で、自分の意見を伝えるだけで、多重課題の中で役割を果たすには至らなかったことが伺えた。【今後の課題】統合技術演習では、チーム看護のイメージ化を図ってから統合実習に臨む。また、学生の体験をフィードバックすることで、状況把握力の育成につながると思われる。統合実習では、発言したり他者の意見を聴くだけで満足せず、チームとしてどのように結論付けていくのか、そしてその方針のために各個人はどのように努力すればよいのかについて意識的に指導をしていく。

P-3-54

内視鏡手術用支援機器(ダヴィンチ)導入への取組み

那須赤十字病院 事務部 管財課

○菊地 純一、唐橋 正弘、室井 純一

【はじめに】当院では、2018年12月に日本赤十字社本社の共同購入に参加する形で内視鏡手術支援機器(ダヴィンチX)を導入した。導入までの取組みと、導入後の問題点などを検証する。【取組み】1)導入方針の検討・決定機種の選定、対象診療科の選定などを実施した。2)ワーキンググループの設置事務部長を長とした、多職種によるワーキンググループを設置し、円滑な導入に努めた。【検証】ワーキンググループを開催し、問題点などの検証を行った。【考察】2019年5月末時点で16件の腹腔鏡下前立腺悪性腫瘍手術(内視鏡手術用支援機器を用いるもの)を実施しており、導入は円滑に行われたと思われる。ただし、その間にも機器トラブルが発生しており、その対応策の確立や、経験の少ないスタッフが従事しているため、継続的な教育及びマニュアルの整備、今後の術式拡大のあり方などの課題も見えてきている。継続したワーキングの開催が望まれると思われる。

P-3-56

黒字病院を目指す、当部署のあり方

北見赤十字病院 物流情報管理室

○芳賀江里佳、宮本 千里、草野奈緒美、深尾美香子、佐藤紗里衣、
笹岡 孝洋、山口 圭介、畑山 美奈、横島 友美、齋澤 広満、
永井 慎也、松原 廣和、荒川 穰二

物流情報管理室は、管理部門と減菌部門で構成されており、管理部門では院内で使用する物品を一元管理しております。具体的にはSPD業務を主とし、発注・納品・入庫処理・倉庫在庫の管理に加え、部署別在庫管理も自部署で行っており、病棟・外来に定数を設定し、在庫の適正管理も担っております。そして医薬品・医療材料・医療機器・検査試薬・什器備品・消耗品等の価格交渉及び採用品見直しやコスト削減の提案も物流情報管理室で行っております。SPD業務における当部署の特色としては、業者より納品された物品をリアルタイムにシステム入庫し常に現在在庫の確認が出来、過剰在庫を防ぐことができます。また不要な在庫の定数削除や日々の欠品時の対応、そして使用期限の把握も可能になります。そのうえ各部署に頻繁に入入することで現場の意見が聞け、意思疎通が容易に行える為スムーズに採用品見直しやコスト削減の提案ができる環境となっております。近年、医療材料管理自体を業者に委託される病院も多い中、院内で管理をすることは現場スタッフが手技に集中でき患者さんにより良い医療を提供できます。そして医師・看護師を含め病院全体でのコスト意識が高まり、毎日の積み重ねが費用削減につながっていくことで、急速な役割は重要だと感じております。私達には一般的な事務職員と違い、医療現場の知識が重要です。一元化を継続していく為には次世代の人材育成が重要だと思えます。今は今まで以上に商品勉強会や知識の共有の場を設けると、人材育成により一層力を入れ、継続的に黒字病院となるよう努力していきたいと考えます。

P-3-58

主体性を育む教育方法の体系化 -京二教育メソッド-

京都第二赤十字病院 看護学校

○嶋田佐和子、甲賀 純子、阿部 真理

【はじめに】看護教育においては、主体的に学び、変化する社会のニーズに柔軟に対応できる看護師の育成についての関心が高まっている。本校では、アクティブラーニングの方法であるポートフォリオ・リフレクション・ルーブリック・マインドマップを講義や実習で導入してきた。一定の成果は得られていると評価しながら進めてきたが、これらは導入時期も異なり体系化できていなかった。また、赤十字の看護師になるためのキャリア形成の全体像も具体化できていなかったことを課題とし、体系化に取り組んだので報告する。【方法】2018年度の学校経営方針に「京二教育メソッド」を構築し、時代に合った教育を実践する」を掲げて教員全員で取り組んだ。本校の教育の中で3年間通じて育成したい能力として、期待する卒業生像に照らし「赤十字プライド」「対人対応力」「看護実践力」「協働する力」「省察的思考力」「自己教育力」「看護観」の7つの能力に整理した。この7つの能力を本校の卒業生像に向かうルーブリックとキャリア形成の全体像の基盤に置いた。それを念頭に、4つの教育方法別に、勉強会や検討会を定期的実施し、各方法の目的・方法・活用例等をまとめ、また赤十字の看護師になるための3年間を私に例えて「KY02-CarrierRainbow」を明示し、「京二教育メソッド」としてガイドブックにまとめた。【まとめ】本校では、4つのアクティブラーニングの方法を段階的に取り入れてきた。これらの方法が主体性を育む効果的な学習方法だけでなく、卒業生像に向かうための方法としても整合性があることがわかった。また学生の3年間のキャリア形成も明示することで各々の内容の目的も明らかになった。教育の目的を見据え方法を体系化することによって、教員も自信をもって教育実践にあたることができると考える。